

News & Scope Handai Hospital

阪大病院ニュース

第46号

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載 (この紙面は再生紙を使っています) 住所/〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15 TEL/06-6879-5021

地域で信頼され 世界へ発信できる医療を

阪大病院の新病院長に4月1日、整形外科・吉川秀樹教授が福澤正洋前病院長の後任として就任しました。吉川病院長は、大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」に従い、阪大病院も地域の患者さんに信頼される医療を提供するとともに、世界に発信できる先端医療の開発の両立を目指していくとして、次のように抱負を語りました。

吉川秀樹・新病院長に聞く



阪大病院は特定機能病院であり、地域の中核病院として、また、豊富な関連病院のヘッドクォーターとして、治療の困難な患者さんの最後の砦となっています。これまでも医療の質の向上と安全性の確保には力を入れてきており、患者さんや地域の医療機関からの信頼を得ていますが、さらに病院の機能を充実させてより信頼される病院としていきます。そのために、病棟機能を効率化してより多くの患者さんを受け入

中治療室の整備を行っています。体に負担が少なく患者さんからの要望も多い内視鏡治療を充実するために、内視鏡センターの拡大整備をいたしました。ロボット手術への関心も高まっており、前立腺がんの手術では保険適用されるようになった手術ロボット「ダヴィンチ」も導入する予定です。漢方や脱毛症、美容医学などの寄附講座ができることにより、診療科の担当範囲が広くなり、技術力もアップしています。今後も充実させていきたいと思っています。

先端医療の開発に関しては、日本発の革新的な医薬品、医療機器を創出するための厚生労働省の早期・探索的臨床試験拠点事業が始まり、阪大病院が拠点の一つに選ばれました。今年、設立10周年を迎える未来医療センターを中心に、臨床応用につながる世界的な治療法の開発にも力を入れていきます。医療安全についても阪大病院は、国立大学

附属病院長会議で医療安全管理協議会を担当しており、中央クオリティマネジメント部を中心に常にリスクマネジメント、クオリティマネジメントの向上に取り組み、患者さんにとって安全、安心な医療を提供できるようにしています。医療の質と安全性の確保には医師、看護師だけでなく職員全員が精神的に余裕を持ち、阪大病院の医療に誇りを持つことが大切です。職員が働きやすい環境を整えることも重要だと考えています。

患者さん目線で快適な病院に



阪大病院のホスピタリティやアメニティを充実させるため、患者サービス企画室が4月に設置されました。吉川秀樹病院長と、同室長の越村利恵副病院長(看護部長)に、どうすれば患者さんにとって心地よい病院になるのかを話し合ってもらいました。

新設の患者サービス企画室長と対談

越村室長 外来の待ち時間が長いという患者さんからのご意見が多いですね。吉川病院長、そうですね。診察前の検査などを効率的に行える体制や、医師が医療に専念できるよう、医師の業務負担軽減策を検討する必要があります。



越村利恵・患者サービス企画室長

また、予約システムを見直すことも必要ではないかと思えます。待ち時間だけでなく、患者さんからのご意見への対応も課題ですね。越村 ご意見箱の質問や要望にはできるだけ早くお応えしたいと思っています。回答や改善策は少なくとも1週間以内には掲示するようにしたいと思っています。診察現場で患者さんがご要望をおっしゃった場合、忙しくても聴くという姿勢を大切にしたいと思っています。患者さんのご要望に対応するサービス係など、必要かもしれません。吉川 24時間営業のローソンやスターバックスコーヒーを導入し、さらにこれからサンドイッチのサブウェイも入店予定です。入院患者さんやご家族の利便性は、良くなっています。病棟でのアメニティについてはどうでしょうか。越村 患者さんのニーズに合わせて、お風呂や車いすで入れるトイレ、ベッド周りなど

まだまだ改善の余地はあると思います。吉川 病院ができてから年月がたちますので、設備が今のニーズに合っていない点が多々あります。改修改良は徐々にしかできないのが現状ですが、できるだけ努力したいと思っています。越村 職員全員が患者さん目線に立って、どうすれば快適な病院になるのかを考え、患者さんのニーズを追求していくことが必要です。越村 患者さんの声、職員の声がたくさん寄せられるような企画室にしたいと思っています。



患者さんと医療者のパートナーシップ
みんなのこころ
いろはうた

全4回シリーズ
~第1弾!~

阪大病院では、患者さんの医療および医療安全への積極的な参加をお手伝いし、患者さんと医療者とのパートナーシップ(協働)を深めることを目的に、「阪大病院いろはうた」という取り組みを2010年6月より行っています。



① 今いちど
自分の名前を
伝えましょう

病院には、よく似たお名前の方がおられます。点滴や検査の前、薬を受け取る時などにはフルネーム(氏名)を伝え、入院中はネームバンドをお見せください。

次回、第47号では「ろ(転倒予防)」「は(紛失予防)」の句を紹介します!

新任部長・施設長ごあいさつ

平成24年4月1日 就任



●材料部長
●サプライセンター長
たかしな まさき
高階 雅紀

高品質で安全な医療を提供するために必要とされる医療器材を、途絶えることなく供給することが、材料部およびサプライセンターの使命です。技術の革新に伴い、洗浄滅菌すべき医療器具や新規に在庫となる医療材料は、年々増加しています。院内の医療器材の適正在庫量を維持することによって病院経営に貢献しつつ、かつ、災害時等の非常事態に対応できる体制と物流量を確保できるように、日々運営に努めてまいりたいと思っております。また、兼務しておりますMEサービス部と手術部も含めまして、病院の基幹部分としてのサービスを向上させ、皆さまの診療のお役にたてれば幸いです。



●放射線部長
とみやま のりゆき
富山 憲幸

放射線部は、さまざまな画像診断機器をそろえた中央診療施設です。阪大病院放射線部には、CTやMRIをはじめ、超音波装置、血管撮影装置、核医学検査装置など最新の機器があり、これらを駆使して日々高いレベルの診療を行っています。今年度は、MRI検査の増加に対応できるよう、最新型3テスラMRI装置の増設が予定されています。今後も、高度先進医療を担う阪大病院に必要とされる最先端機器をいち早く導入して、正確な診断・治療を提供することにより、患者さんの診療に貢献できるよう田中副部長およびスタッフ一同で努力したいと考えております。



●手術部長
みなみ まさと
南 正人

大阪大学の手術部では、全国の国立大学病院の中でもトップクラス、年間9,000件近い手術が行われています。その内容も、種々の先進的な手術、全種類の臓器移植手術など、各分野をリードしています。また大阪大学の手術部は、名だたる診療科長の諸先生をはじめ、實川佐太郎先生、池田卓也先生、中田精三先生というわが国の手術医学の発展に貢献された先生方が、部長として率いて来られた歴史という大きな看板も背負っています。この伝統のうえに立って、「安全で質の高い医療を効率よく」の理念を大切に、患者さんが安心してできる環境、全員が働きやすい職場を高いレベルで維持しながら、更なる発展をめざして尽力したいと考えています。



●栄養マネジメント部長
しもむら い ちろう
下村 伊一郎

栄養マネジメント部は現在、栄養サポート部門(NST)：和佐勝史副部長、栄養代謝制御部門(過剰栄養)：前田和久副部長、栄養治療食管理部門ならびに栄養管理室：安井洋子副部長・室長からなります。大阪大学は中心静脈栄養ならびに肥満症の学問の草分けであり、栄養マネジメント部はその臨床実施の現場として大きな役割を果たしてきました。今後さらに、高度医療、在宅医療、他部門との連携、医療者の教育といった大学病院としての責務を構成員皆で果たしていきたいと存じます。



●移植医療部長
さわ よしき
澤 芳樹

本院で行われた第1例目の脳死心臓移植から13年がたち、2年前から改正移植法が施行され脳死臓器移植が急増しております。すべての臓器移植が可能な大阪大学がわが国における牽引役として果たすべき役割は大変大きいと認識しております。国内移植医療拠点化、移植学会との連携、市民公開講座の開催や院内移植システムの合理化、移植病棟運営、移植コーディネーター等も含めて新たな体制の整備を進めて、移植医療の一層の発展を進めていきたいと考えております。



●卒後教育開発センター長
らくぎ ひろみ
樂木 宏実

卒後教育開発センターは、医学部卒業後2年間の初期臨床研修における阪大プログラム、ならびに卒後3年目以降を対象とした阪大専門医育成プログラムを軸として、研修医教育、専門医教育、リサーチマインドを持った高度医療を推進できる指導医の養成に関わっています。大学病院、関連病院、及び連携病院全体でのローテーションを前提とした専門医育成を充実させたいと思います。また、医学系研究科との連携を強め、「地域に生き世界に伸びる」という大阪大学の理念に沿った医師を育成し、地域医療への貢献と阪大病院のさらなる発展に尽力したいと思います。



●生殖医療センター長
の のむら のりお
野々村 祝夫

現在、約7組に1組が不妊症夫婦とされていますが、今後さらに晩婚化傾向が進めば、その割合は増加するものと予想されます。同時に、生殖医療の進歩はめざましく、これまで挙児が絶望視されていた夫婦にも、その可能性が広がりつつあります。生殖医療センターでは、産科・婦人科と泌尿器科がそれぞれ妻、夫を同日に診療した上で、密に連絡を取ることで夫婦を総合的に診療できるよう努めたいと思います。我々はこれまで、非閉塞性無精子症に対する精巣内精子採取術を400例以上に施行し、その40%以上で精子採取が可能で、その後の顕微授精により実際に挙児を得てきました。今後も、先進的な生殖医療を、横断的な連携と十分なインフォームド・コンセントの上、積極的に進めていきたいと考えております。



●疼痛医療センター長
よしみね としき
吉峰 俊樹

「痛み」は心理面でも身体面でも患者さんを苦しめ、生活の質を低下させる重要な問題ですが、原因や対処法はさまざまであり、一つの領域で対応できるものではありません。そのため阪大病院疼痛医療センターでは全国でも珍しい形で多くの診療科と診療部門が協力し、年間600人ほどの患者さんの治療に当たっています。この領域をリードするセンターではありますが、まだいたらぬ点もあります。これからも新しいアプローチを取り入れながら、「疼痛治療」という医学の中で最も重大な課題の一つに取り組んでいきたいと考えています。



●遺伝子診療部長
もちづき ひでき
望月 秀樹

遺伝子診療部は、急速に進歩する遺伝子に関する情報をもとに、十分にみなさんの疑問に答え、今後の医療に生かしてもらうために設立されました。多くの専門診療科の協力の下に、さまざまなみなさんの遺伝に関する悩みを解決するための最新の知見と検査に関する情報をお伝えしています。カウンセリングは、臨床遺伝専門医、臨床心理士、看護師など、複数のスタッフで行っています。私は、これらの臨床活動がよりいっそう飛躍できるように、サポートしたいと考えております。



●医療技術部長
どい つかさ
土井 司

医療技術部は、検査部門、放射線部門、リハビリテーション部門、臨床工学部門がそれぞれの特徴を生かしながら、高度で専門的な技術を医療に提供している部門です。近年の医療技術の進歩と発展によって、機器管理、安全確保、精度の高い技術と情報の提供は、必須になっています。日本屈指の高度先進医療を行っている本部門が果たすべき役割の重大さを強く認識して、医療スタッフを啓発する活動も必要だと感じています。私たちが病院の潤滑油となって、より一層スムーズな医療に貢献できるような、組織作り、システム作りを進めていきたいと考えています。



●呼吸器センター長
おくむら めいのしん
奥村 明之進

呼吸器疾患は、肺癌・転移性肺腫瘍・縦隔腫瘍・胸膜悪性中皮腫などの腫瘍性疾患、肺炎・結核・真菌症などの感染症、間質性肺炎・肺気腫などのびまん性肺疾患、膿胸・気胸などの胸膜疾患など広範囲に及びます。これらを診断から治療まで統合的に診療するには、呼吸器内科、呼吸器外科、放射線診断科、放射線治療科、核医学診療科、その他の関係診療科の間の密接な連携が不可欠です。今回の呼吸器センターの開設により、阪大病院では呼吸器疾患の診療が一層効率的かつシームレスに運営されることになります。阪大病院が呼吸器疾患の診療と研究の拠点として責務を果たせるよう、立花副センター長およびスタッフ一同で努力していきたいと思っております。



●ハートセンター長
こむろ いっせい
小室 一成

ハートセンターは、9階東西病棟の循環器内科と心臓血管外科をまとめることにより、循環器診療を合理化し、より高度な効率良い医療を目指しています。重症心不全、虚血性心疾患、不整脈、弁膜症治療などにおいて、循環器内科と心臓血管外科は緊密な連携のもと、最善の診療を行ってきました。以前から循環器内科も西病棟にあるCVCU(心臓集中治療室)を使用していましたが、重症患者の急増により、CVCU6床では慢性的に不足していました。この4月からCCU(冠疾患集中治療室)6床が東9階に開設されたことにより、高度な循環器内科診療が実施できます。今後は、循環器内科、心臓血管外科との協力体制を一層強化し、循環器疾患診療の質と量、両面での向上を目指したいと思います。

血管腫・血管奇形にチームで挑む

形成外科

阪大病院形成外科では傷痕や先天的な外見の異常の治療のほかに、がん手術によって失われた組織の再建を行っています。また、診断や治療の難しい血管腫・血管奇形に関して、専門外来も開設して他の診療科と連携して治療成果をあげ始めており、全国各地から患者さんが紹介受診されています。

赤ちゃんの皮膚に赤いあざが見られたり、成長してから青あざが膨らんだりすることがあります。これらは生まれつきの血管の異常であることが多く、現在では「血管腫・血管奇形」と呼ばれています。「静脈奇形」は血管奇形の中で多くありますが、経過によっては別の種類のものと判明することも多く、経過観察、手術、投薬、レーザー治療と対処方法が異なります。また、体表の平坦な赤あざは「毛細血管奇形」と呼ばれ、レーザー治療によって治療できることもあります。「静脈奇形」は血管奇形の中で多く

まで病気の進行を客観的に評価することが難しくなりましたが、当科では「血管のかたち」に注目した新たな診断基準を治療に役立て始めています。小さな動脈静脈奇形は切除ができませんが、大きなものは放射線診断科と連携して血管を内側から閉塞させる治療を行います。また、内部の血流が速すぎたり、血管が細すぎたりして治療が難しくなったりする「動脈静脈奇形」と判明することもありますが、これ

このように血管腫・血管奇形は診断が難しいので、放射線診断科・小児外科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、整形外科、病理部など関係各々の担当医が集まって治療方針を検討するカンファレンスも毎月開かれています。「診断ができない」「治療法がない」と言われた血管のあざで悩んでいる方は、主治医を通して当科にご相談ください。（レーザー治療については、機器を持つ関連病院への紹介となります）

生活を重視し、質の高い治療

化学療法部

化学療法部の外来化学療法室では、がん治療を受ける患者さんに外来で安全、快適に化学療法（抗がん剤治療）を受けていただいています。これまで成人が対象でしたが、一部の小児患者さんを受け入れるようになりました。また、リウマチなどの自己免疫性疾患の患者さんの利用も増えています。



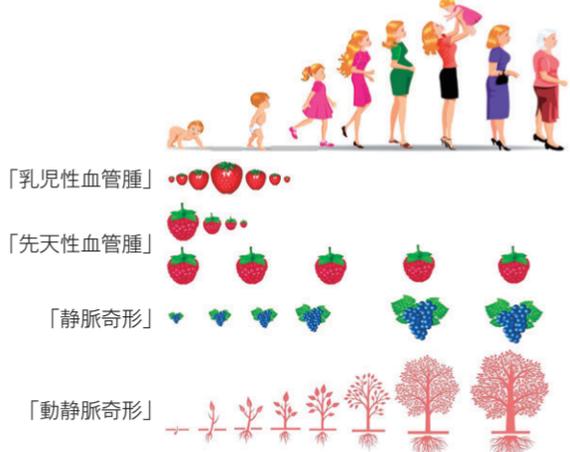
乳幼児の患者さんのため、家にいるかのように工夫し準備した外来化学療法室の一角

全に治療を受けることができるよう、専門の医師・看護師が治療を提供する同室で行うようになりました。テレビ付きリクライニングシートが19床（3床は臨床試験部との共用です）。現在は年間約7600人、1日約31人の幅広い診療科の患者さんに利用していただいています。抗がん剤治療は、患

け少なくなるように調整しています。一方、小児科の患者さんについてはお一人ずつ、主治医と相談してご家族にも納得していただければ同室で治療を行うこととなりました。乳幼児治療の際には、床にかわいいウレタンブロックを組み合わせたマットを敷き、壁には漫画のキャラクターを張り、子供の好きなアニメのDVDも流し、家にいるのと同じような雰囲気になっています。授乳したり、飲み物を飲んだりするのも自由で、家族で過ごせるように2床分を使うこともあります。また、リウマチや炎症性腸疾患などの免疫

に關係する病気の治療には、炎症を抑える抗生治療薬が使われるようになりまし。副作用に注意をしながら定期的に外来での投与が

必要なため、同室で治療して。現在は年間約1400人です。これからも増えることが予想されます。これからの患者さんが社会生活を営みながら、安全で質の高い外来化学療法を受けられるように、各診療科と連携して尽力していきます。



「血管腫」と診断されるものでも実際はさまざま

抗がん剤による有効治療の開発と副作用対策の進歩により、外来でも安全に抗がん剤治療が受けられるようになり、平成15年に外来化学療法室がスタートしました。それまでは、各診療科の外来で行っていたのですが、患者さんがより快適に、安

者さんによって副作用の質、強さが違うため、主治医と密に連携して情報交換しながら、負担が少なく効果的な治療を行うことを心がけています。また、同室で用いる全ての抗がん剤は薬剤部で調製していますが、それぞれの治療法のプロトコル（計画書）を確認して心の注意を払い、しかも待ち時間ができるだ

阪大腎友会は、阪大病院腎臓内科に通院中の患者さんが、腎臓病について正しい知識を身につけ、日常生活の中で上手に活かしながら自宅でスムーズに腎臓病治療ができることを目的として、平成11年に患者会として発足しました。患者さん同士が情報交換したり経験を語り合うために、患者さんとそのご家族が主体となつて会を運営され、腎臓内科医師や看護師、管理栄養士が会のサポートをしています。

会員は現在60人で、定期的に勉強会を行い、

食事療法もおいしく、楽しく



腎臓病の食事療法は、塩分とたんぱく質の制限が不可欠なため、患者さんにはあまり評判が良くありません。そこで毎回、栄養管理室の管理栄養士の指導のもと、阪大病院のスタッフが工夫を凝らして作っ

た食事を一緒にいただきます。今回の食事は「春のユーロランチ」がテーマでした。春野菜のミネストローネスープ、海の幸と菜の花のパエリア、2種類のアスパラガスのマリネ（トリコルフ風味）、トリコロールプリンがメニュー。こんなにおいしい腎臓病食1食分が、塩分1.9g、たんぱく質15.0g、エネルギー643kcalとは信じられないと、盛り上がりまし。詳細は腎友会のホームページ（http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/kid/jnyukaitml）をご覧ください。

腎臓病の食事療法は、塩分とたんぱく質の制限が不可欠なため、患者さんにはあまり評判が良くありません。そこで毎回、栄養管理室の管理栄養士の指導のもと、阪大病院のスタッフが工夫を凝らして作っ

腎臓病の食事療法は、塩分とたんぱく質の制限が不可欠なため、患者さんにはあまり評判が良くありません。そこで毎回、栄養管理室の管理栄養士の指導のもと、阪大病院のスタッフが工夫を凝らして作っ

臨床試験部



治療のゆるキャラちけん君を、診察待ちの子どもたちが取り囲んだ

治療ってなに？

新しく開発された薬の承認を厚生労働省から受けるため、有効性や安全性などを患者さんに協力していただいで調べる治療について理解を深めてもらおうと、阪大病院臨床試験部が3月27、28日、エントランスホールで治療啓発キャンペーンを

行いました。治療の必要性や方法、ルールなど記したイラストの大型パネルを展示し、治療のことがわかりやすく書かれたパンフレットを配布したり、アンケートに答えていただいた治療のゆるキャラちけん君が登場すると、外来で診察を待っていた子どもたちが取り囲み、握手したり、抱きついたりするなど大人気でした。阪大病院では、国が定めた厳しいルールに従って、患者さんのプライバシーと安全を守りながら治療を行っています。現在、製薬会社が行う治療の他に、

医師が主導して行う治療も実施しています。また、安心して治療に参加していただけるようにクリニカル・リサーチ・コーディネーターが患者さんの相談に応じるなどの対応も行います。どのような治療が行われているかは、臨床試験部（06-6879-5111）代表）にお問い合わせいただくか、ホームページ（http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/epc/summary/execute.html）の「募集中の治療」をご覧ください。ちけん君は社団法人日本医師会治療促進センターのキャラクターです。

阪大腎友会

3月17日には阪大病院14階会議室で阪大腎友会「春のつどい」が開催されました。今回は、腎臓病患者にとつて避けることのできない「療法選択外来・保存期教育外来」について北村温美医師が、「腎臓移植」について猪阪善隆診療科長が講義をされました。また松本稔子看護師が、腹膜透析を

腎臓病の食事療法は、塩分とたんぱく質の制限が不可欠なため、患者さんにはあまり評判が良くありません。そこで毎回、栄養管理室の管理栄養士の指導のもと、阪大病院のスタッフが工夫を凝らして作っ

腎臓病の食事療法は、塩分とたんぱく質の制限が不可欠なため、患者さんにはあまり評判が良くありません。そこで毎回、栄養管理室の管理栄養士の指導のもと、阪大病院のスタッフが工夫を凝らして作っ

春のミニコンサート 歴史20年の 千里マンドリンアンサンブル

春のミニコンサートが、4月3日にエントランスホールで行われました。今回は、今年で結成20年を迎える歴史あるクラブ「千里マンドリンアンサンブル」の皆さん30人が来てくださいました。

マンドリンのやわらかな音色で「シルクロード」など数曲が演奏されました。患者さんたちみんなが演奏に合わせて「ふるさと」「ドレミのうた」を歌い、和やかに春のひと時を楽しんでいただきました。



盗難事件が発生、ご用心を

最近、病棟において、デイルームでの面会や買い物などで病室を離れた少しの間に、現金等が盗まれる事件が発生しております。病棟には業者や面会者など不特定多数の人が出入りすることから、不審者の出入りを監視するため、今年1月下旬から外部からの各出入口に監視カメラを設置しています。

また、病棟各階の非常口にも監視カメラを設置し、盗難事件が発生した場合には不審者を特定できるように画像記録を行っております。4月からは安全監視員を増員し、病棟の巡回を強化することにより、盗難抑止に努めていきたいと思っております。

院内学級「卒業を祝う会」



阪大病院の院内学級で3月9日、卒業を迎える2人の児童を囲んで「卒業を祝う会」が行われました。院内学級の1年間をスライドショーで振り返ったあと、在校生によるキーボードの演奏、ボランティアとして情報学習をサポートしてくださった関大生たちの歌と演奏、先生たちのトーンチャイムの演奏と、いろいろな出し物を楽しみました。ゲームをしたあと、色紙のプレゼント、卒業生のことばがありました=写真。

また、フィリピンに支援に行っている関大生から、インターネットを使ってお祝いのメッセージが届き、卒業生も在校生も大喜びでした。

他に中学校を卒業する生徒が1人いましたが、この日は通学していた学校の行事に参加していました。

男性看護師からの メッセージ

看護師といえば女性の職業だと認識されていた時代は既に過去のものとなり、現在は男性看護師の認知度も随分と高くなりました。

数年前にテレビドラマ「ナースマン」が放送された影響も大きい

と思いますが、患者さんと日夜向き合って看護に取り組む真摯な姿勢が、少しずつ評価されてきた結果だと信じて疑いません。

現在、阪大病院で働く看護師は約920人で、そのうち男性は50人程度、つまり全体の約5%にしか過ぎず、まだまだ女性優位の職場環境であることに変わりはありません。

しかし、活躍の場は、高度救命

救急センターや手術部、一般病棟、外来など女性看護師と何ら変わらず、男性ならではの感性を最大限に生かしながら、患者さん中心の看護に取り組んでいます。

私たち男性看護師一人一人がこの職業に高い誇りを持ち、時には壁にぶつかりながらも患者さんに安心していただける看護が行えるよう、日々前向きに頑張っています！



患者さんに優しく接する男性看護師

手続き時間を短縮、快適環境に

入退院センターなど改修



阪大病院の入退院センターと入退院玄関が改修されました。広く明るくなって、入退院の手続きをスムーズに行えるようになりました。自動ドアの位置を工夫し、寒い日でも待合室に風が吹き込むこともなく快適に待ち

いただけるようになり、病院の「第二の顔」としてふさわしい姿になりました。改修後のセンターは受付カウンターが広くなり、2カ所だった窓口が5カ所に増えたため、待ち時間が短縮されました。内訳は入院の担当

窓口が4カ所、退院窓口が1カ所。これまではかなり待つていたことも多く、予約入院の患者さんの手続きが終わるのが昼前になることもありました。改修後は午前10時過ぎには終了するようになりました。

その結果、病棟への入院が予約時間通りに行えるようになり、看護師にとっても準備をしやすくなりました。また、順番待ち番号の発券機を備え、受付窓口の番号表示板を設置したため、不在時に自分の番号が呼ばれた場合でも、戻った時にわかるようになりました。

待合の面積が約2倍になったうえ、さすがに20脚から30脚に増え、入院手続き待ちの患者さんやご家族が廊下にもあふれることもなくなり、病院ボランティアの方々も活動しやすくなりました。

PET施設の開所式



体内での医薬品の動きを画像化

阪大病院に、ヒトに投与された医薬品が体内の中でどのように吸収、代謝、変化していくかを画像化できるPET施設「PETマイクロドーズパッケージ」が完成し、3月26日に開所式が行われました。

この施設は、GMP（厚生労働大臣が定めた品質管理基準）をクリアした医薬品を製造できる標識合成設備・放射性医薬品が体内をどのように動くかを詳細に追跡できるPET-CT・血液中の微量な医薬

品濃度を測定できるシステム
・患者さんの個人情報に外部からアクセスできない守秘性を保証した画像ネットワークから成り立っています
この施設の完成によって、臨床で処方されている医薬品や新薬になる可能性のある化合物の臓器内濃度、滞留時間、排泄経路、標的外臓器への集積などを画像化することができるようになりました。

入院時には病棟まで持っていく荷物が多くなり、トヤ台車を入り口付近に置くことで、「使いやすくなった」と患者さんやご家族に満足していただいております。

救急センターの整備工事を進めておりますので、ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

院玄関付近で高度救命

このことにより副作用の少ない安全な医薬品の開発、医薬品の投与法の最適化、新薬を作る期間の短縮・経費節減が期待されます。